



プロフィール

1974年東京大学医学部医学科卒業後、内科全般の研修を積み、その後、生活習慣病、なかでも糖尿病を中心として診療・研究を進めてきました。特に、糖の取り込みを担う糖輸送担体の世界レベルの研究は有名で、1992年には日本糖尿病学会学会賞（若手研究者賞）を受賞しています。同時に、糖尿病患者の遺伝子解析でも大きな研究成果をあげ、1993年日本医師会研究助成賞、1994年日本内分泌学会研究奨励賞を受けました。このように、糖尿病ではどうして血液中の糖分が多くなるのか、どのようなひとが糖尿病になりやすいのかなどの優れた研究が評価され、1994年山口大学医学部内科学第三講座教授に就任。2001年東北大学大学院医学系研究科内科病態学講座教授として転任。2007年第50回日本糖尿病学会の会長を務め、2008年日本糖尿病学会学会賞を受賞し、2009年には第106回日本内科学会会頭を務めます。内科学、特に生活習慣病・糖尿病の分野で日本を代表する医学者です。

研究内容

◇糖尿病の発症進行、治療法を追求

健康は何にも増して大事なものです。残念ながら、私たちには様々な病気があります。私は内科の医師・研究者として、世界中で増加している生活習慣病のひとつ、糖尿病に注目しています。糖尿病はなぜ生じるのか、なぜ発症後も進行するのか、どう治療すればよいのかを研究しています。

糖尿病は血液中の糖分の多すぎる病気です。実は、体がうまく働くためには、血液中の糖分は必ず必要です。減りすぎると困るのです。ところが、今は過食・運動不足になって、糖分が多すぎるひとが増えてきたのです。私たちは、脳、肝臓、筋肉、脂肪などの体の中にある臓器が、それぞれ勝手に糖分やエネ

ルギーの調節をするのではなく、お互い神経を使って連絡をして、体全体として調和を保っていることを見つけました。これは、これまで膵臓から出るインスリンなどのホルモンが中心と考えられていた全身の臓器間の代謝情報連関に、自律神経系が関与していることを示したものであり、代謝における脳の管制塔としての役割を示唆するものとして世界の注目を集めています（図1）。

また、糖尿病の発症進行にはインスリンを出す膵臓の細胞の生存・維持が密接に関係しており、これについても研究を進めています（図2）。これらの研究は、糖尿病を根本から治す治療に結びついていくと期待されています。

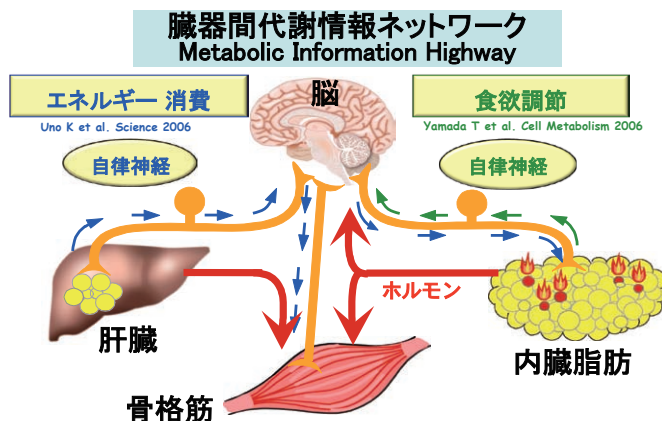


図1

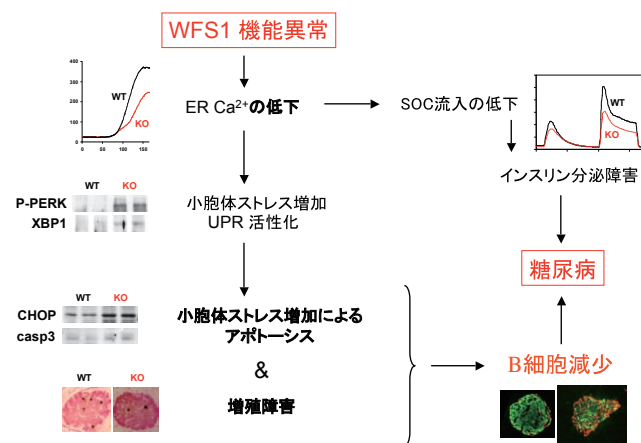


図2

メッセージ

◇努力している研究者のところに幸運は来る

医学は日々進歩しています。医療も進歩しています。これまで治らなかった病気にも治るものが出てきています。この進歩を誰が生み出してくれたのか、誰の研究がその進歩につながったのか、考えたことがありますか。あなたもそのひとりになってください。

医学・医療の進歩には、思いがけない発見が契機となることがよくあります。このような能力を「セレンディピティ」と呼んでいます。偶然から幸運を見つけ出す能力です。では、どうすれば「セレンディピティ」を持てるのでしょうか。決まった正

解はありません。広い視野、批判的な目、などが挙げられますが、それで十分とはいきません。ただひとつ言えることは、努力している研究者のところに幸運は来る、というのが私の今までの経験です。

私たちが最近見出した、代謝情報臓器間ネットワークは体内に内在している恒常性維持機構と思われます。この発見もセレンディピティによるものだと思います。この代謝情報臓器間ネットワークがどんな物質によって介在されているのかを明らかにできると、この過栄養時代の肥満・糖尿病に対する新規治療法の開発という、私たちの夢も達成されると期待しています。